

平成 2 年度 (2020 年度)

武庫川女子大学大学院

修士論文要旨

大学女子カテゴリーにおいて全日本学生選手権
大会優勝経験を有するコーチの実践知
：ダブルゴール・コーチングに着目して

健康・スポーツ科学研究科健康・スポーツ科学専攻

薦田 遥

【背景】

スポーツコーチング現場には、性別や種目に関係なく育成年代から完成年代まであらゆる年齢カテゴリーにおいて勝利至上主義が蔓延している。本研究では、勝利至上主義を勝利のみを目指す価値観や考え方（関，2020）と定義し論を展開する。勝利至上主義のコーチングを行うことによって、様々なハラスメントを伴った指導を誘引することが、スポーツコーチング現場において大きな社会問題になっている。これに対し、米国では Scoreboard（スコアボード）と Mastery（熟達）という 2 つの目標に焦点を当てるダブルゴール・コーチングが Thompson(2003)によって提唱されている。日本においてもその普及が進んでいる。ダブルゴール・コーチングは単に勝つことだけに注力するのではなく、技の熟達・向上に注力する指導を行うことによって勝利は選手が技能熟達を達成しようとするその道のりで発生する副産物であるという考え方である。勝利至上主義を克服するためにはコーチにはどのような思考と行動が必要か、またそれらはどのような契機によって修得していくことが可能なのかを、ダブルゴール・コーチングに焦点を当て事例的に明らかにすることはコーチングにおける重要な研究課題になると考えられる。

【研究目的】

本研究では、勝利至上主義コーチングに陥らずに大学日本一を達成したトップコーチが、どのような体験を契機にコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを確立していったのか、そのプロセスをダブルゴール・コーチングに着目しながら、質的研究の方法を用いて明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

調査対象者：勝利至上主義コーチングに陥らずに大学日本一を達成したトップコーチとして武庫川女子大学カヌー部のプロコーチである橋本千晶氏（以下「橋本コーチ」と略す）を調査対象者とした。

調査方法：1) アンケート調査 2) インタビュー調査（半構造化面接法） 3) 逐語録の作成とメンバーチェック 4) SCAT による分析とメンバーチェック

図 1 に大谷（2007）が提唱している SCAT 法による分析の手順と特徴を示した。

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
ストーリーライン（観時点で見えること）							
理論記述							
さらに追求すべき点・課題							

手順1. セグメント化したデータをテキスト欄に記述する
手順2. ステップ①注目すべき語句を抜き出す
手順3. ステップ②抜き出した語句を言い換える
手順4. ステップ③抜き出した語句を一般的な概念で言い換える
手順5. ステップ④記述内容を説明することができる構成概念を記述する
手順6. 構成概念を紡いでストーリーラインを記述する

SCAT法では、コーディングの手順と手法が明確に定められており、研究資料としたテキストデータ全てを分析に使用するという特徴があることから、研究者の主体的な解釈を積極的に用いながらも恣意的な解釈に陥る危険性が少なく、一事例の比較的小さなデータの分析にも用いられている実績がある（大谷，2007）

図1. SCATによる分析の手順と特徴

【結果】

1. 4 ステップコーディング：インタビュー調査の逐語録から、SCAT の 4 ステップコーディングの手順 1～手順 5 を経て、全 118 個の構成概念を抽出した。表 1 に橋本コーチの SCAT 分析フォームを使った 4 ステップコーディングの一例を示した。

2. ストーリーライン：4 ステップコーディングによって抽出した全 118 個の名詞句の「構

表1. 第一期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発言者	テキスト	＜1＞テキスト中の注目すべき語句	＜2＞テキスト中の語句の言い換え	＜3＞左を説明するようなテキスト外の概念	＜4＞テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	＜5＞疑問・課題
1	聞き手	「あなたの人生で最初にコーチになりたいと思ったきっかけは何ですか」					
2	コーチ	きっかけは一般企業で働いている時に、それまでも何かに教えたいと思っていたんですけど、自分にはまだそんな知識も何もなかったんで、自分に引き出しを色々つけてからそういう職業に就きたいなと思っていたのが、その一般企業で働いている時に、今やと思ったからです。	きっかけ/何かに教えたい/今やと思った	最初のきっかけ/自分の夢/直観	生涯の中でやりたいこと/自分の人生を変えようとした瞬間	自分の中にある本当の欲求との出会いの瞬間	・一般企業での経験で生かされていることは何か
3	聞き手	「その今や、は急にですか」					
4	コーチ	事務作業というか普通のオフィスで働いていたので、ここでは自分の何か可能性が見つけられないと思ったもので、やっぱり何か教えたいとすぐ思いました。その何日か後には社長室に行って辞めまして言いに行きました。	事務作業/オフィスで働いていた/自分の何か可能性が見つけられない/何かに教えたい	一般企業のOL/道を離れた未来/自分の夢/違和感	一般職への違和感/未来への閉塞感/転機/決断	企業の一般事務職への違和感と未来への閉塞感から辞職を決断	・どんな気持ちだったのか/バックパッカーの経験について

成概念」を全て接続詞や動詞で紡ぎ、構成概念間の関係性を表したものをストーリーラインとして記述した。橋本コーチがコーチングを開始してから現在に至るまでの約 24 年は、コーチのおかれていた環境、体験した出来事、コーチの思考と行動の変化といった観点から、大きく「カヌーを教えるという夢と海外で教えるという夢の同時スタート期」→「指導観・コーチング・フィロソフィーの基礎の形成期」→「勝利渴望期」→「連覇期」の 4 つの期に別けることができた。

【考察】

本研究では、橋本コーチのコーチングの変遷からみた 4 つの期それぞれについて、ストーリーラインに含まれる構成概念を、コーチのおかれていた環境、体験した出来事、そこから生まれる思考と行動の変化といった視点から関係性を図示することによって理論記述を行った。SCAT 法では、ストーリーラインから共通な構成概念を抽出することによって理論記述を行い、複数のインタビュー結果から得られた知見を一般化していく作業が可能になる。しかし本研究は、橋本コーチの一事例であるため、ストーリーラインも一事例となる。全てのコーチが、橋本コーチと全く同じ経緯を辿ることは不可能であるため、橋本コーチの一事例から全てのコーチに一般化できる理論記述を行うことはできない。しかし、會田

（2014）が指摘しているように、コーチングの熟達過程という文脈とともに記述して

いくことによって、コーチ自身が私にも当てはまる部分があるかもしれないと類推できればコーチング現場において有用な知見を得られるかもしれない。橋本コーチの熟達過程を概観し、勝利至上主義コーチングを克服するために必要な思考と行動という視点から、現場のコーチに有用となる視点の抽出を試みた。図 2 に、橋本コーチの熟達過程を、『経験』と『体験』に分けて時系列的に示した。4 期の中には 7 つの【経験】が含まれ、現場のコ

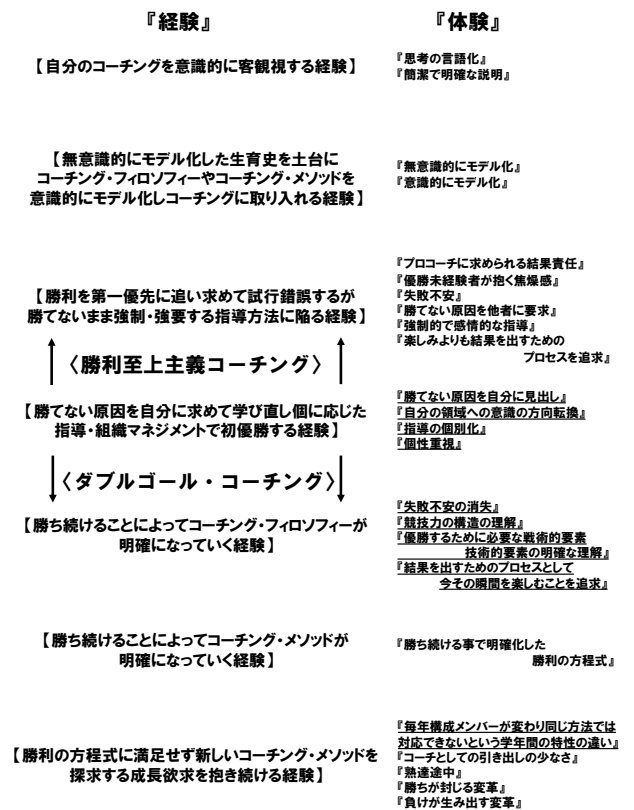


図2. 橋本コーチの熟達過程で起こった経験と体験

ーチへ一般化できる計 24 個の『体験』があることを表している。また、24 個の体験のうち『 』で表した 9 個の『体験』は、先行研究の知見から勝利至上主義コーチングを克服するために必要な体験であると解釈できたものを示している。

橋本コーチが勝利渴望期（前半）に勝利至上主義コーチングに陥ったように、現場のコーチは、勝てない時期に勝利至上主義コーチングに陥ってしまう可能性が極めて高いと考えられる。しかし、橋本コーチは 9 個の『体験』うち 5 個を、勝利渴望期（後期）以降に体験している。このことは、コーチの思考と行動次第では勝利至上主義コーチングに陥らずに勝利渴望期を超えて初優勝期を迎えたり、連覇期を経験したりすることが可能であることを示唆している。

そこで、図 2 に示した橋本コーチの熟達過程から抽出された現場のコーチに一般化できると考えられる 24 個の『体験』と、その中に含まれる勝利至上主義コーチングを克服するために必要と考えられる 9 つの『体験』を、ストーリーラインとして再文脈化することで、勝利至上主義コーチングに陥ることなくポジティブコーチングが実践できるトップコーチへと熟達していくための道筋を表 2 に提案する。本研究の結果から、Mastery の先にある Winning を目指すという Thompson (2003) のダブルゴール・コーチングの思考と行動を意識し、自分にコントロールできることに意識を向けることで失敗不安を低下させることが、勝利至上主義コーチングやバイオレンスを伴ったコーチングに陥ることなく、結果的に勝利へ近づく思考と行動であることが確認された。

表 2. 現場のコーチに一般化できる体験を再文脈化したストーリーライン

コーチがトップコーチへと熟達していくためには、コーチングの初期段階から自分のコーチングを意識的に客観化するために、『思考の言語化』と『簡潔で明確な説明』を習慣化することが必要不可欠である。また、コーチは他者のコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを『意識的にモデル化』して取り入れることだけでなく、他者の生き方や考え方から影響を受け自分が『無意識的にモデル化』しているコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドが何かを省察して意識化する機会をつくることも重要である。

コーチングの熟達過程の中において、『プロコーチに求められる結果責任』や『優勝未経験者が抱く焦燥感』から勝利至上主義コーチングに陥ってしまう可能性が高く、勝利渴望期にはコーチ自身や選手の『失敗不安』が高まり、コーチは『勝てない原因を他者に要求』し、『強制的で感情的な指導』に陥ってしまう危険性や、『楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追求』するコーチングを行ってしまう危険性がある。しかし、勝利渴望期でも、コーチは『勝てない原因を自分に見出し』、『自分の領域への意識の方向転換』を行うことで、『指導の個別化』や『個性重視』の指導が可能になると考えられる。

コーチの熟達と共に深まる『優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解』や『競技力の構造的理解』は、コーチや選手の『失敗不安の消失』に繋がり、『結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求』することができるようになる。

また、連覇期には『勝ち続ける事で明確化した勝利の方程式』が出来上がってくるが、成功体験に固執することは結果的に『コーチとしての引き出しの少なさ』を生み出し、学生スポーツの特徴である『毎年構成メンバーが変わり同じ方法では対応できないという学年間の特性の違い』に対応できない原因となる。連覇期においても、コーチ自身がまだまだ自分は『熟達途中』であるという自覚と謙虚さを持つことができれば、『勝ちが封じる変革』という現状維持思考を打破して新たな挑戦へと踏み出す勇気も湧いてくる。たとえ連覇や連続出場などが途絶えたとしても、それを『負けが生み出す変革』のチャンスと捉えることができれば、コーチとしての更なる熟達へと繋がっていきと考えられる。

【まとめ】

橋本コーチは 7 つの経験によって勝利至上主義コーチングを脱却し、ダブルゴール・コーチングのフィロソフィーとメソッドを確立していったと解釈することができた。また、SCAT 法により抽出した 118 個の構成概念のうち 24 個が橋本コーチの文脈がなくてもコーチに一般化できる体験と解釈することができた。さらにそのうち 9 個は、勝利至上主義コーチングを克服するために必要な体験と解釈することができた。

【文献】

大谷尚. 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学），54（2），27-44，2007.

関朋昭. 勝利至上主義批判に対する批判の反証：スポーツの定義と価値から. 北海学園大学経営論集，17（3），117-129，2020.

Thompson, J. THE DOUBLE-GOAL COACH. 31-34. Harper Colins Publishers, 2003.